

青森県野辺地方言における主格標示と情報構造

言語学・応用言語学専門分野

1LT15106R

2015 年（平成 27 年）入学

芳賀 湧

2019 年（平成 31 年）1 月提出

要旨

本論文は、青森県野辺地方言における主格助詞 *ŋa* の出現条件について考察する。

此島（1982）は（1）のように野辺地方言では主格助詞があらわれることはないと言っていた。しかし、実際は野辺地方言において（2）のように主格助詞 *ŋa* があらわれる場合があることが判明した。本論文ではこの主格助詞 *ŋa* が用いられる環境に情報構造が関与していることを示す。

(1)	dee	taroo ba	nagasedano?
	dee=φ	taroo=ba	nak-sase-ta=no?
	誰=NOM	太郎=ACC	泣く -CAUS-PST=Q
「誰が太郎を泣かせたんだ？」			

(2)	「(いつも勝っている) 次郎が勝ったの？」	という質問に対して
	ijaija	taroo <i>ŋa</i> kattajo
	ijaija	taroo= <i>ŋa</i> kat-ta=jo
	いやいや	太郎=NOM 勝つ-PST=SFP
「いや太郎が勝ちました」		

本論文は *ŋa* の出現には、「対比性」と「聞き手への意外性」の双方が揃っていることが必要であると指摘する。（2）では「対比性」と「聞き手への意外性」の両要素を含んでいるため *ŋa* があらわれる。本論文は野辺地方言において主格助詞 *ŋa* が出現することを示し、その出現環境を指摘する初めての研究である。

目次

1.はじめに	1
1.1. 対象とする方言	1
1.2. 言語現象	1
2.先行研究	3
2.1. 主語の格標示	3
2.1.1. 下地 (2019)	3
2.1.2. 加藤 (2015)	5
2.2. 対比焦点	6
2.2.1. Malte Zimmermann (2008)	6
2.2.2. Angel L. Jimenez-Fernandez (2015)	8
2.3. 焦点階層	8
2.3.1. Shimoji (to appear)	8
3.野辺地方言の主格標示	10
3.1. 調査概要	10
3.2. 調査内容・結果	10
4.今後の課題	15
4.1. 調査結果のまとめ	15
4.2. 今後の課題	15
4.2.1. 標準語化	15
4.2.2. <i>ŋa</i> 以外の主格助詞	17
4.2.3. その他	18
グロス一覧	21
参照文献	22

1. はじめに

1.1. 対象とする方言

本研究では、青森県上北郡野辺地町で使用されている野辺地方言を対象とする。青森県の方言は八甲田連峰を境に津軽方言、南部方言の2種類に分類される。さらに南部方言は下北・上北・三八の3種類の方言に下位区分されている。当方言はこの内、南部方言の上北方言に属するとされている。また野辺地町と隣接する平内町は津軽弁に属するとされており、両町は1kmばかりしか離れていないにもかかわらず、語彙や文法において方言の混同が起きていない。「顎」を津軽方言では「オドゲ」、南部方言では「アギタ」というように明らかな対立があると指摘されている（平山 2003）。

話者の数については正確な数は不明であるが、当町のみの高年齢層が使用し、若年層は使用されることはないといわれている。

当方言の特徴としては、江戸時代に普及した北前船によって京文化との接触があり、従来の南部弁に加えて近畿方言の影響を受けているとされている。

1.2. 言語現象

東北方言では広く主格の格助詞があらわれないことが一般的となっている。「格助詞では、東北方言全般と同様に「が」「を」にあたる語を欠いており、主格・目的格で文脈にゆだねられる」（九学会連合下北調査委員会 1964）とあり、例えば山形県米沢市方言や山形市方言でも格助詞の不使用が一般的な特徴として挙げられている（竹田 2012）。他にも宮城県気仙沼市でも同様に格助詞があらわれない（佐藤 2013）。

野辺地方言でも、主格を表す格助詞があらわれないことが以前から報告されていた（此島 1982）。以下に示す例は、筆者の調査によって得た野辺地方言の例文データである。

(1)	ie	kaettara	odotto	sage	nonnderatta
	ie	kaer-ta-ra	odotto=φ	sage	nom-te i-ta
	家	帰る-PST-COND	弟=NOM	酒	飲む-CVB PROG-PST
「家に帰ったら、弟が酒を飲んでいた」					

(2)	taroo	sotode	sawaiderubei
	taroo=φ	soto-de	sawag-te i-ru=bei
	太郎=NOM	外=LOC	騒ぐ-CVB PROG-NPST=SFP
「太郎が外で騒いでいるよ」			

(1) では主語の odotto「弟」が主格助詞を伴わず、(2) では主語の taroo「太郎」が主格助詞を伴わずに出現している。

ところが、筆者の調査の結果、野辺地方言では主格助詞 η a が特定の環境で出現しうることがあると明らかになった。

(3) 「お前が一番酒を飲むの？」に対する応答として

ija	odotto	{ η a/ \emptyset }	itiban	sage	nomujo
ija	odotto={ η a/ \emptyset }		itiban	sage	nom-ru=jo
いや	弟=NOM		一番	酒	飲む-NPST=SFP
「いや、弟が一番酒を飲むよ」					

(4) 「庭で声が聞こえるけど、お兄ちゃんが遊んでるの？」に対する応答として

ija	odotto	η a	asondreijo
ija	odotto= η a		asob-te i-ru=jo
いや	弟=NOM		遊ぶ-CVB PROG-NPST=SFP
「いや、弟が遊んでるよ」			

このように野辺地方言では、主格助詞の出没に関して何らかの条件が関与していると予想できる。そこで本研究では、「野辺地方言では主格助詞が出ない」というこれまでの見方に対して、新たな見方を提示することを目的とする。

(5) 本研究の主張

- a. 主格の有形格標示に関する分析：主格助詞 η a は、特定の環境において出現しうる。
- b. 主格標示に有標性に関する分析：従来の考え方と異なり、(基底に存在するはずの) 主格助詞が「省略」されて無助詞になるのではなく、無助詞が基本であるところに、ある要因で主格助詞が出現しうる、という見方が妥当である。

2. 先行研究

1 節で示した *ŋa* があらわれる 2 つの例文 (3) (4) には共通点があるということがわかった。それは両者とも「主語に焦点があたった対比焦点の文」ということである。

つまり野辺地方言において格助詞があらわれる現象には情報構造が深く関わっていることが予想される。そこで本章では、情報構造と主語の格標示に関して、先行研究を概観する。

2.1. 主語の格標示

2.1.1. 下地 (2019)

下地 (2019) によると、現代日本共通語（口語）に関して、「ガ」で標示される主語が文中に生じるは、情報構造の観点から 2 つの場合がある。一つは、文全体に焦点があてられている文焦点 (= 中立叙述) の時である。((6) (7) (8) の下線部は焦点範囲である)

(6) 子どもたちが遊んでいる (自動詞主語;S:ガ)

(7) 弟が一番酒を飲む (他動詞主語;A:ガ 目的語;P:ヲ)

もう一つは文全体ではなく主語にだけに焦点が当たっている主語焦点 (= 総記) の場合である。WH 応答などがそれに該当する。

(8) (誰が酔っぱらってたの？に対して)

弟が酔っぱらってたの

一方で主語が「ハ」で標示する場合もあり、その時、主語は主題 (= 前提) となる。この主題標示の「ハ」はあらゆる項を主題要素として標示する機能をもち、特に周辺項の場合には、格助詞に後続する形（ニハ、デハ、カラハなど）であらわれる。したがって「ハ」は格標示と別にレベルに属する情報構造の標示（とりたて標示）にかかわる要素とされ、とりたて助詞と呼ばれる。

「ガ」と「ハ」は置き換えの関係（パラディグマティックな関係）にあるようにみえるものの、「ニハ」、「デハ」、「カラハ」など例を踏まえ、格標示ととりたて標示を別のカテゴリーとして整理する必要から、現在の日本語研究では格ととりたてがシンタクマティックな関係にある、みるのが主流である。

(9) 親父は酒を飲んでいる

親父ガ+ハ→親父ハ

また、「ガ」は主語の標示だけではなく、主題解釈の回避するための脱主題化標識でもあると述べられている。下地（2019）は以下のような仮説を提示している。

(10) 主格ガに関する脱主題化仮説

- a. 主題主語に働く無標バイアス：主語は主題であることが機能的に無標（デフォルト）である。よって、主語が主題となる場合（期待される役割を担うとき）、主題標示ハは必須でない。
- b. 非主題主語に働く有標バイアス：主語が主題とならない場合（期待される役割から逸脱するとき）、主題ではないことを示す標示（脱主題標示）が必要となる。主格助詞ガは、主語であることを標示するのに加えて、脱主題化の機能をもつ各標識である。

すでに多くの研究で、「主題主語は形式的に無標になりやすい」ことが指摘されている。また、口語において述語焦点における主語はそもそも発話されないことが多く、発話されても主題標示のハが生じないことがある。（11a）では主語の「親父」に対して「ハ」で主題標示をすることも「ハ」を「φ」に置き換えるてもよい。そして（11b）のようにそもそも主語である「親父」を発話しないことも可能である。

(11) 【述語焦点】「お父さんどこ？」に対して

- a. 親父{は/φ}酒飲んでるよ
- b. （親父は）酒飲んでるよ

一方で非主題主語の場合は、（11a）のような格の交替は起きづらい。（12）（13）（14）はいずれも「ガ」と「φ」の交替は認められない。

(12) 【文焦点】「さっきから外見てるけど、どうしたの？」に対して

- 俺の友達{が/*φ}遊んでるんだよ
- 俺の友達{が/*φ}飯食ってるんだよ

(13) 【項焦点】

- 俺の友達{が/*φ}遊んでるの（「誰が遊んでるの？」に対して）
- 俺の友達{が/*φ}飯食ってるの（「誰が飯食ってるの？」に対して）

(14) 【連体節・条件節内】

[俺の友達{が/*φ}遊んでる]時/[俺の友達{が/*φ}遊んでたら]教えて
[俺の友達{が/*φ}飯食ってる]時/[俺の友達{が/*φ}飯食ってたら]教えて

(10) の脱主題化仮説と、(11) ~ (14) で見出された、「ハ」と「φ」は交替しやすく、「ガ」と「φ」は交替しにくいという言語事実により、「ガ」の標示によって、主語が主題ではないことを明示する、すなわち「脱主題化」が起きているということがわかる。

なお、デフォルト予測に反する場合にガをつけることで非主題を明示することはあくまでも経済性の原則に基づいているとみる分析である。つまり、明確な文法判断の対象にはならない。という見方に立っている。明らかに非主題であることがわかって場合にガをつけることは過剰標示に過ぎず、非文法性に直結するというわけではない。

2.1.2. 加藤（2015）

加藤（2015）はある特定の場面ではゼロ助詞が適切でガがあると逆に不自然になると指摘している。

(15) a 【母親が居間にいる子どもたちのところに来て言う】

「ケーキ φ ほしい？」

b 【母親が居間にいる子どもたちのところに来て言う】

*「ケーキがほしい？」

(15a) は母親が聞きたいことは、「ほしい」のが「ケーキ」であるかどうかということではなく、「ケーキ」について子どもたちが「ほしい」と思うかどうかということであり、「ケーキ」と「ほしい」は同じ重みを持っていると見ることができる。(15b) では「ケーキ」に焦点が当たってしまい、「ほしい」が前提として解釈されてしまう。これによって(15b) が不自然なものになっている。また、談話における知識の新旧（文脈による変化）が無標に関わっているかというと(15) に関しては影響するとは言えない。

(16) a 【母親が居間にいる子どもたちのところに来て言う】

「ねえ、ケーキ φ もらったんだけどね。どう？ ケーキ φ ほしい？」

b 【母親が居間にいる子どもたちのところに来て言う】

「ねえ、ケーキ φ もらったんだけどね。どう？ ケーキ φ ほしい？」

(16b) の不自然さはやはり変わらない。知識の新旧はゼロ助詞かどうかについて関わっていない。

ゼロ助詞が情報として同じ重みを持つように作用すると考える。ゼロ助詞によってガのつく名詞句に対する焦点が外れることと解釈できるとするとゼロ助詞の機能は《脱焦点化》と見ることができる。

名詞句を NP、格助詞を CM、Pred を述部要素とすると、脱焦点化は NP-CM-Pred という形式文の中で、NP が最重要情報である、すなわち Info (NP) >Info (Pred) と解釈されるのを回避する機能である。つまり、NP-φ-Pred という文では情報の重要度が Info (NP) \leq Info (Pred) と解釈される。

(17) a 【知りあいにその日初めて会う。挨拶を交わした後の第一声】

「私 φ 風邪をひきましてね」

b 【知りあいにその日初めて会う。挨拶を交わした後の第一声】

*「私は風邪をひきましてね」

c 【知りあいにその日初めて会う。挨拶を交わした後の第一声】

*「私が風邪をひきましてね」

これは「は」の対比解釈、「が」の総記解釈を避けた結果、ゼロ助詞しか残らないという消去法だと説明できるだろう。しかし、(17a) は「私」を消去した「風邪をひきましてね」でも成り立つことから、Info (私) <Info (風邪をひいた) という関係が成立しているともいえる。つまり「私」が出る場合は無標によって脱焦点化していると説明できる。加藤 (2015) はこのように発話者の被解釈意図 (こう解釈してもらおうという意図) によってゼロ助詞の選択がなされると述べている。

以上、2つの考え方について、筆者の見方は「主格助詞が出ないことが基本であり、表されることには特別な理由がある」というものであり、加藤 (2015) や下地 (2010) で述べられたゼロ助詞やハダカ格のように助詞があらわれないことが意味を持っているとは考えない。今回の研究においては下地 (to appear) の「格助詞があらわれるのはあらわれないデフォルト予測に反しているからである」という考え方を支持する。

2.2. 対比焦点

2.2.1. Malte Zimmermann (2008)

Zimmermann (2008) は対比とは質問—返答文という組み合わせにおける網羅的な答え

や、対比的な文、正しい事実へ焦点をあてるといった様々な言語現象と結びつけられている。会話・意味論現象として考える場合、対比とは特定の焦点の意味内容は話者の立場からすると聞き手には予想しないものだと述べている。話者から直に聞き手の注意を向ける、状況に応じて背景前提を移すための追加の文法的マーカーとされている。

Zimmermann (2008) は対比について以下のような仮説を立てている。

(18) 対比焦点の仮説

焦点となっていることからについての対比マーカーは聞き手があることからもしくは発話行為の要素を含むことからについて、共通認識の上でありえるとは思わないという話し手の仮定を表している

(19) a Q: What did you eat in Russia? A: We ate *pelmeni*.

b A: Surely, you ate *pelmeni*! B: No, *caviar*, we ate/No, we ate ↑*Caviar*!
(↑=raised pitch)

対比焦点マーカーは一般的に (19a) のように Wh-疑問文にはない。一方で (19b) のような訂正文にはある。前者について (18) の仮説から Wh-疑問文への答えは要求された情報に対する答えであり、その答えは話し手が聞き手は驚かないと想定できるために対比焦点マーカーがない。(19a) を例にあげると、「ロシアでは何を食べたか」という疑問に対して「*pelmeni* を食べた」と返したが、返答者は「ロシアで *pelmeni* を食べることは聞き手にとって驚くことではない」と考えているため対比焦点マーカーがない。一方で (19b) では聞き手は自分の言葉を訂正されるとは予想していないと話し手が想定するために対比焦点マーカーがあらわれる。同様に (19b) を例にあげると、聞き手の「あなたたちは *pelmeni* を食べた」という断定を否定し、「*caviar* を食べた」と訂正することは聞き手に取って予期せぬことだと話し手は想定したため対比焦点マーカーがあらわれる。

(20) Q: What did you eat in Russia? A: *Caviar* we ate./We ate ↑*caviar*!

一方で (20) のような答えが予想できる Wh-疑問文でも話者 (A) にとって焦点である *caviar* の情報構造は対比焦点のマーキングをすべきだと判断されるくらい予期できないものであるとされる。

対比焦点は話者と聞き手の伝達情報の対比を示しており、その過程で選択肢の対比を表すこともある。

また、対比焦点は意味論的特徴に基づいているとされており、この特徴として網羅性を挙げている。このような意味論的特徴を見ることで対比焦点を分析することができるとも述べている。

2.2.2. Angel L. Jimenez-Fernandez (2015)

Jimenez-Fernandez (2015) は対比焦点は選択肢もしくは話者ないし聞き手によって話される直接の拒否であると述べられている。

(21) A: I know that Susana is going on vacation with Angela and Jimena.

B: No, she is going with Jimena.

(21) は A がスサーナがアンジェラとヒメナと一緒に休暇に行くのかに対して B がヒメナ一緒に行くと答えている。このように与えられた情報の除去と新情報の挿入を対比焦点は担っていると考えられている。

2.3. 焦点階層

2.3.1. Shimoji (to appear)

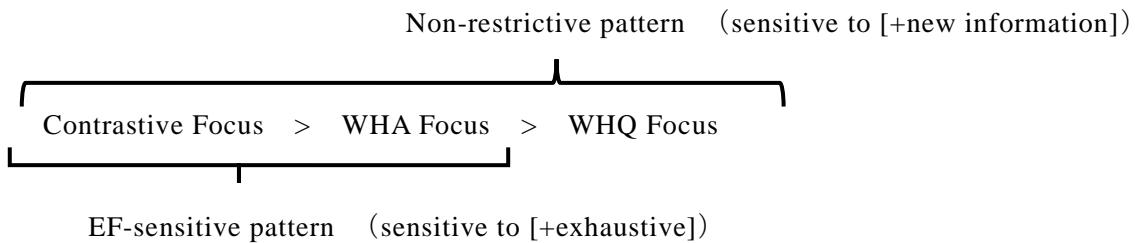
対比焦点には選択肢の閉集合を引き起こす「対比性」、選択肢の閉集合のさらに部分的な集合を特定する「網羅性」、文脈や状況上において初めてあらわれる情報、いわゆる「新情報」の 3 つの機能を示している。

(22) It is not Y but X who broke the chair.

(22) を例にすると、「Y と X 以外に候補はない」という集合の範囲を狭めて他の候補を排した状況が「網羅性」、「Y ではなく X である」という X と Y を比較した選択肢が「対比性」である。

また対比標識の様々な分類特徴は CF-sensitive (Contrastive Focus-sensitive)、EF-sensitive (Exhaustive Focus-sensitive)、Non-restrictive の 3 つに分けることができる。CF-sensitive は焦点標識が対比焦点の文のみに可能なものである。EF-sensitive は対比焦点に加えて網羅的焦点の文にも可能なものであり、Non-restrictive は焦点タイプに関係なく、焦点標識が可能なものである。

Shimoji (to appear) によると、この 3 つのパターンは焦点タイプと焦点標識の間で階層的な関係がある。



言語が階層上の特定の点で対比標識を認める場合、左に行けば行くほど焦点標識を見込む必要がある。例えばある言語で WHQ Focus に焦点標識を許すのであれば、WHA Focus も Contrastive Focus も許さなければならぬ。

焦点を示す助詞を伴った焦点標識はそれが焦点だと理解させるための明確な手段であり、構造上の有標化と機能的な有標化の間で類似していると仮定すると Contrastive Focus は WHA Focus よりも焦点標識を起こしやすい。つまり、WHA Focus の文に焦点を示す助詞があらわれるような言語は Contrastive Focus の文にも現れなければならない。

このことから CF-sensitive、EF-sensitive、Non-restrictive の 3 要素の階層性は

CF-sensitive > EF-sensitive > Non-restrictive

となる。

3. 野辺地方言の主格標示

3.1. 調査概要

2017年6月から2018年11月にかけて計3回の調査を実施した。調査対象はいずれも現在野辺地町在住の方で1回目にT氏(70代女性)、KA氏(女性)、KS氏(70代女性)の3名、2回目に1回目と同じ方に加えてN氏(70代女性)、S氏(70代女性)、Y氏(70代女性)の5名、3回目にT氏に行った。調査は調査票を用いた面接調査で行った。

調査内容はこちらが示した例文を野辺地方言で話してもらい、その際に格助詞の *ŋa* があらわれるかどうか、もしくはつけることが許容できるかどうかを調べた。

3.2節以降で調査結果を例文を用いながら述べていく。なお、第一発話であらわれない場合も後からつけることができると言わされたものについては{}内の後者に示す。

例文について、自然談話の中で格助詞があらわれない文において、下地(2019)でも述べられていたようにその格助詞が格標示だけでなく主題標示の役割も持っている可能性もあり、それらを判別することはできない。そのため、こちらが用意した例文ではその役割がわかるように意図的に操作した例文を用いている。

また結果に *ŋa* があらわれる要因に話者が使う言葉が方言ではなく共通語であるためにあらわれる場合も想定されるが、話者の回答の中に *ŋa* を容認することができない例もあったことから、話者が話している言葉は方言であり、標準語化していないといえる。

3.2. 調査内容・結果

(23) 対比焦点

「お前が壺を割ったのか？」に対して

ija,	wa	de	neejo	taroo	{ŋa/φ}	jattajo
ija	wa=de		na-jo	taroo={ŋa/φ}		jar-ta=jo
いや、	私=COP		ない=SFP	太郎=NOM		やる-PST=SFP
「いや、俺じゃないよ。太郎が割ったよ」						

(24) WH 疑問

dee	taroo	ba ¹	nagasedano?
dee=φ	taroo=ba		nak-sase-ta=no?
誰=NOM	太郎=ACC	泣く-CAUS-PST=Q	

「誰が太郎を泣かせたんだ？」

¹ 野辺地方言において//ba//があらわれることで対格が標示され、その結果主格標示をしないという相互識別の考え方も想定されるが、本研究では他動詞主語に限らず自動詞主語においても//ŋa//があらわれるため、本論文では//ŋa//は対格との相互識別の役割は持たないとする。

(25) WH 応答

(24) に対して

dʒiroo {φ/ŋa}	taroo ba	nagaseta
dʒiroo={φ/ŋa}	taroo=ba	nak-sase-ta
二郎=NOM	太郎=ACC	泣く -CAUS-PST
「二郎が太郎を泣かせた」		

(23) ~ (25) の 3 つの文について、このうち (23) と

(25) に *ŋa* があらわれた。しかし、前者が第一発話であらわれ、後者については何とか許容できるという差があった。この結果からこの方言では Shimoji (to appear) で述べられた焦点階層があるといえる。

(3) (4) の例文とも合わせて、筆者は *ŋa* を容認できる条件の一つとして、主語に焦点が置かれた主語焦点かつ対比焦点であるから対比が関わっているのではないかと考えた。

また、Zimmermann (2008) でも述べられているように対比焦点には「対比性」以外にも「意外性」や「網羅性」の要素が含まれている。しかし、対比焦点の文だからといってこれらの要素全てが含まれているわけではないと筆者は考えた。例えば、太郎・次郎・花子の 3 人がじゃんけんを 1 回し、その結果についての「3 人の中で太郎が勝ったですか?」という質問の返答として

(26) いや、太郎じゃなくて花子が勝ちました。それから次郎も勝ちました。

この文の場合、「対比性」の要素は含まれている。しかし、「網羅性」の要素は含まれていない。

「意外性」についても、「じゃんけんでいつも負けている太郎」と「じゃんけんで負けなしの花子」がじゃんけんをするという誰しも花子が勝つだろうと予想する状況で「(勝つとは思わないが) 太郎が勝ったですか?」という質問に対して、

(27) いや、太郎じゃなくてやっぱり花子が勝ちました。

この場合、「対比性」「網羅性」の要素は含まれているが、「花子が勝つ」ということは話し手も聞き手も予想していたため、文に「意外性」の要素は含まれていない。

このように一概に対比焦点であっても、「対比性」「網羅性」「意外性」の要素が常に含まれているとは限らない。

また、Zimmermann (2008) は対比とは話者の聞き手に対する意外性に依る、つまり聞き手にとって予期できるものか予期できないものである述べている。しかし、筆者は対比にも話し手自身の意外性にも依る、つまり話し手にとって聞き手に伝える内容が自身にとって予期できるものか予期できないものかも影響すると考えた。(3) (4) や (23) (26) (27) では訂正文として聞き手の情報を否定し、話し手の知っている事実を伝えるだけにすぎなかつたため、話し手の「意外性」という要素は含まれていなかった。

(28) いいえ、花子ではなく、あの太郎が勝ちました。

「太郎と花子の二人が剣道の試合をした。下馬評では誰しも花子が勝つと考えられていたが、大番狂わせで太郎が勝ったらしい。そこで試合を見た人に「花子が勝ちましたか」と聞いた」という文脈で (28) はそれに答える人も「まさか太郎が勝つとは」と「意外性」をあらわしている。この文には話し手の「意外性」だけでなく「対比性」「網羅性」の要素も含まれている。

以上を踏まえて、筆者は以下のような仮説を立てた。

(29) *ŋa* の出現と対比焦点の関係についての仮説

ŋa の出現に対比焦点が関わっている。この対比焦点には「対比性」「網羅性」「意外性」の 3 要素があり、さらに「意外性」は「話し手」「聞き手」によって 2 つに分けることができる。この要素は常に対比焦点の文に含まれているわけではなく、文脈や状況によっては対比焦点の要素として含まれていない場合がある。つまり *ŋa* はただ対比焦点の文であるためにあらわれるのではなく、これら 4 つの要素が関係しあってあらわれるのである。

(29) を確かめるために、この 4 要素を組み合わせた以下の 16 タイプの例文を用意し、それぞれ//*ŋa*//があらわれるかどうかを調べた。表における+はその要素を含み、-はその要素を排したものである。

表 1 *ŋa* があらわれる要因とその組み合わせ

	対比	意外性（聞き手）	意外性（話し手）	網羅性	<i>ŋa</i>
1	+	+	+	+	○
2	+	+	+	-	○
3	+	+	-	-	○

4	+	-	-	-	X ²
5	+	+	-	+	X
6	+	-	+	+	X
7	+	-	+	-	X
8	+	-	-	+	X
9	-	+	+	+	X
10	-	+	+	-	X
11	-	+	-	+	X
12	-	+	-	-	X
13	-	-	+	+	X
14	-	-	+	-	X
15	-	-	-	+	X
16	-	-	-	-	X

上述の通り、Shimoji (to appear) で述べられた焦点階層がこの方言でも起こることから、筆者は「対比の要素を含んだ文には必ず *ŋa* があらわれ、対比の要素を含まず、他の条件を含んだ文にあらわれない（表 1 の 1 ~ 8 のタイプ）」という仮説を立てた。

これから実際に調査した結果、*ŋa* があらわれた文を示していく。なお以下に示す例文の番号の横に数字が振られていた場合その数字は表 1 の数字と対応する。

文脈：負けなしの太郎といつも負けてばかりの次郎が戦った。結果を知らないが、風の噂で太郎が勝ったと聞いたある人が同じ噂を聞いて結果を確かめた人に尋ねている。

(30) ① 「次郎が勝ったの？」という質問に対して

ijaija	taroo	ŋa	kattajo
ijaija	taroo=ŋa		kat-ta=jo
いやいや	太郎=NOM		勝つ-PST=SFP
「いや太郎が勝ちました」			

文脈：太郎と花子、次郎の三人がスポーツで勝負をした。誰もが太郎が勝ち、残りの二人は負けると思われているという状況で、第三者に結果を尋ねている。

² 4 で用いた例文では//ŋa//以外の主格助詞があらわれた。これについては、4.2.2 節で説明する。

(31) ② 「太郎が勝ったの？」という質問に対して

ija taroo de nagu ano hanako no hoo ja
ija taroo=de na-gu ano=hanako=no=hoo=ja
いや 太郎=COP ない-ADVLZ あの=花子=GEN=方=NOM

katta debai. ato ano dʒiroo mo katta noi
kat-ta=debai. ato ano=dʒiroo=mo kat-ta=noi
勝つ-PST=SFP. あと あの=次郎=ADD 勝つ-PST=SFP

「いや太郎じゃなくてあの花子が勝ちました。あとあの次郎も勝ちました」

文脈：太郎と花子と次郎の三人がいる。三人は何かしらのスポーツをし、その結果について勝負を見ていた第三者に尋ねている。

(32) ③ 「三人の中で太郎が勝ったの？」という質問に対して

ijaija taroo de negu hanako no hoo ja katta
ijaija taroo=de na-gu hanako=no=hoo=ja kat-ta=
いやいや 太郎=COP ない-ADVLZ 花子=GEN=方=NOM 勝つ-PST=
debai
debai
SFP

「いや太郎ではなく花子が勝ちました」

仮説と異なり、1～3のみに *ja* があらわれ、4～8では *ja* が認められなかった。この結果から (33) がいえる。

(33) //*ja*//があらわれる文には少なくとも「対比性」と「聞き手への意外性」の2つの要素が含まれている

しかし、その逆である (34) が正しいとはいえない。

(34) 「対比性」と「聞き手への意外性」の要素が含まれている文には//*ja*//があらわれる

4. 今後の課題

4.1. 調査結果のまとめ

- (x) 「対比性」と「聞き手への意外性」は、*ŋa* の出現において必要条件である。*(ŋa* が容認されるとき、その文は「対比性」と「聞き手への意外性」の要素をもつ)
- (y) 「網羅性」と「話し手の意外性」は *ŋa* の出現に関与していない。
- (x,y) から、*ŋa* は、「対比性」と「聞き手への意外性」を持った主語に対して出現可能である。この時、その文に「網羅性」や「話し手の意外性」の要素の有無は関係ない。

また、(5) で述べた筆者の仮説通り、野辺地方言では主格助詞があらわれないことがデフォルトであり、*ŋa* の出現によって意味を持つ（本論文では「対比性」と「聞き手への意外性」を示す）ということがいえる。この場合、下地（2019）が述べた「脱主題化」と加藤（2015）が述べた「脱焦点化」の内、野辺地方言における主格助詞の標示は「脱主題化」が起きているとするのが妥当である。

4.2. 今後の課題

4.2.1. 標準語化

調査していく中で、同じ意味でも方言かそうでないかで *ŋa* の有無が変わるという結果が得られた。

文脈：母親が夕食のつまみ食いをしたのが誰かを子供たちに問いただしている

(35)	a taroo	kutta	nde	neega
	taroo=φ	kuw-ta-te	na=ka	
	太郎=NOM	食べる-PST-QUOT	ない=Q	
「太郎が食べたと思う」				

b	taroo	ŋa	tabeta	nde	neega
	taroo=ŋa		tabe-ta-te	na=ka	
	太郎=NOM		食べる-PST-QUOT	ない=Q	
「太郎が食べたと思う」					

この両者の差は動詞「食べる」の表現の差である。(35a) の /kuu/ は野辺地方言における「食べる」を意味している。一方で /taberu/ は馴染みのない、話者の方曰く標準語³のように感じるとのことだった。

³ ここでいう「標準語」は日本語の共通語だと思われる。

(35) と同じ文脈で

- (36) a taroo to dʒiroo do kutta
taroo=to dʒiroo=do kuw-ta
太郎=COM 次郎=PL 食べる-PST
「太郎と次郎が食べた」

- b taroo to dʒiroo ŋa tabeta
taroo=to dʒiroo=ŋa tabe-ta
太郎=COM 次郎=NOM 食べる-PST
「太郎と次郎が食べた」

(36) でも /kuu/ と /taberu/ のそれぞれで ŋa が有標かどうか変わっている。なおこの do は複数を表す接辞ありで主格を示す格助詞ではない。

文脈：「お前が壺を割ったのか」と聞かれる

- (37) a ija, taroo kasita
ija taroo=φ kas-ta
いや 太郎=NOM 壊す-PST
「いや、太郎が壊した」

- b ija taroo {ŋaφ} kowasita
ija taroo={ŋaφ} kowas-ta
いや 太郎=NOM 壊す-PST
「いや、太郎が壊した」

野辺地方言では「壊す」のことを /kasu/ という。こちらを使うときは ŋa は認められない。/kowasu/を使用した場合に ŋa は有標となる。

(35) や (36) の文は対比焦点の文ではなく、WH 応答の文である。しかし (35b)、(36b) には ŋa があらわれる。この結果はこれまで述べてきた ŋa の出現と情報構造との関係を崩してしまう。

文脈：目上の方のところにお土産を持って訪問し、その人からお土産の中身を聞かれる

- (38) okafī ŋa haittemasu
 okafī=ŋa hair-te-mas-ru
 お菓子=NOM 入る-CVB-POL-NPST
 「お菓子が入っています」

文脈：太郎と次郎の二人が試合をし、その結果をあまり親しくない人から尋ねられる

- (39) taroo ŋa kattan dajo
 taroo=ŋa kat-ta-dajo
 太郎=NOM 勝つ-PST=SFP
 「太郎が勝ちました」

(39) の文脈に対して、親しい人に尋ねられた場合は、

- (40) taroo katta noii
 taroo=φ kat-ta=noii
 太郎=NOM 勝つ-PST=SFP
 「太郎が勝ちました」

4.2.2. ŋa 以外の主格助詞

調査の中で以下のような例文を得た。

文脈：太郎と花子の二人がいる。二人は何かしらのスポーツで勝負をした。太郎はいつも負けていたので今回も負けるだろうと思われていた。ところが、太郎が勝ったという噂が流れてきた。その噂を確かめた第三者に結果を尋ねている。

- (41) 「太郎が勝ったの？」という質問に対して
- | | | | | | | | |
|-------------------|----------|----|----------|-----------------|--------|---|--------|
| ija | taroo | de | nagu | hanako | no hoo | a | katta. |
| ija | taroo=de | | na-gu | hanako=no=hoo=a | | | kat-ta |
| いや | 太郎=COP | | ない-ADVLZ | 花子=GEN=方=NOM | | | 勝つ-PST |
| 「いや太郎じゃなくて花子が勝った」 | | | | | | | |

この時主格助詞は、ŋa ではなく a 出現した。この a については菅沼（1935）が、助詞「ガ」が主語と連続で発話する際に (42) のように「ガ」が「ア」に変化したと述べている。

(42) 雨ア降る (=雨ガ降る)

この a と η a の関係や、「ア」が本当に主格助詞なのかについては先行研究がなく、また本調査の中でも (41) にしか出てこなかつため、 η a のみを扱う本論文では考慮外とした。改めて、 η a と a が共存できるか、もしくはどちらが一方だけが出現できるか、その時の文の情報構造はどうなっているかを確かめる必要がある。

4.2.3. その他

標準語化以外にも情報構造と関係なく、 η a があらわれるものがあった。

文脈：試合をして帰ってきた相手に「お前が勝ったのか」と聞く。

(43)	wa	de	nagu	taroo	katta	nojo
	wa=de		na-gu	taroo=φ	kat-ta=nojo	
	私=COP		ない-ADVLZ	太郎=NOM	勝つ-PST=SFP	
「私じゃなくて太郎が勝ったよ」						

文脈：ある日以前あった試合について「あの時お前が勝ったのか」と聞く。

(44)	wa	de	nagu	taroo	{ η a/φ}	katta	nojo
	wa=de		na-gu	taroo={ η aφ}		kat-ta-nojo	
	私=COP		ない-ADVLZ	太郎=NOM		勝つ-PST=SFP	
「私じゃなくて太郎が勝ったよ」							

(43) は対比性と聞き手への意外性の要素を含んだ文であり、 η a が出ないことは結果通りである。しかし、同じ条件である (44) では η a が認められる。この文は文脈にある通り、過去の出来事の想起である。つまり、過去のことを話す時は情報構造との関係なしに η a が認められる可能性がある。

文脈：母親が夕食のつまみ食いをしたのが誰かを子供たちに問いただしている

(45)	つまみ食いをした人に聞く
	taroo tabetajo
	taroo=φ tabe-ta=jo
	太郎=NOM 食べる-PST=SFP
「太郎が食べたよ」	

(46) つまみ食いをしていない人に聞く

taroo ja tabetajo
taroo=ja tabe-ta=jo
太郎=NOM 食べる-PST=SFP
「太郎が食べたよ」

(45) (46) の「太郎が食べたよ」は「(自分ではなく) 太郎が食べたよ」という意味が隠れており、対比といえる。つまり、ja はあらわれるはずである。しかし、(45) では ja は認められない。これはつまみ食いをした人が嘘をついたものの、実際は自分が食べている、つまり対比の事実はないことから無意識的に対比の要素を排してしまったのではないかと考えられる。このように自分ではないと嘘をついたときには ja が認められない可能性がある。

(47) de ja taroo ba nakasetano?

de=ja taroo=ba nak-sase-ta=no?
誰=NOM 太郎=ACC 泣く-CAUS-PST=Q
「誰が太郎を泣かせたんだ？」

(24) WH 疑問

dee taroo ba nagasedano?
dee=φ taroo=ba nak-sase-ta=no?
誰=NOM 太郎=ACC 泣く-CAUS-PST=Q
「誰が太郎を泣かせたんだ？」

この (24) に対し、(47) では ja があらわれている。どちらも「誰が太郎を泣かせたの」という意味ではあるが、この「誰」を示す範囲がそれぞれ異なっている。(24) では「誰かわからないが一人が太郎を泣かせた」という意味であり、(47) は「誰かわからないが複数人が太郎を泣かせた」という意味となっている。

(48) a 「誰が酔っぱらってたの？」に対して

odotto ei
odotto=φ ei
弟=NOM 酔う
「弟が酔っぱらってたの」

b	odotto	ŋa	ei
	odotto=ŋa		ei
	弟=NOM		酔う
	「弟たちが酔っぱらってたの」		

(48) は WH 疑問の文であり、(48a) では *ŋa* は認められなかった。しかし、(48b) では //ŋa// が認められ、その時名詞に複数の意味が加わった。このことから *ŋa* には複数の意味を付与する役割があるという可能性がある。

しかし、野辺地方言では複数をあらわす接語//do//があることから (49) (50) のような文もありえるのではないか。

(49)	?odotto	do	ei
	odotto=do		ei
	弟=PL		酔う
	「弟たちが酔っぱらってたの」		

(50)	?odotto	do	ŋa	ei
	odotto=do=ŋa			ei
	弟=PL=NOM			酔う
	「弟たちが酔っぱらってたの」			

(49) が認められた場合、必ずしも *ŋa* があらわれないことが情報構造との関係ではなく、*do* と *ŋa* がそれぞれ複数の意味をもつて過剰表現を避けたともとられてしまいかねない。

(50) も認められた場合、過剰表現が許容されたもしくは *ŋa* が違う役割を持っているという可能性もあるので、確かめる必要がある。

他にも例文は得られなかつたが、話し手がすでに誰がやつたかわかっているという文脈で「誰がやつたのか」と問いただす時は、*ŋa* は絶対にあらわれないことがあるといふ。これについては確かな確証がないため、例文を用いて検証する必要がある。

以上のこととは本研究の中心となつた情報構造と関係が全くないと言い切る根拠がまだないため今後、情報構造との要素を絡めていきながら再度調査していく必要がある。

グロス一覧

-		接辞境界
=		接語境界
ACC	accusative	対格
ADD	additive	累加
ADVLZ	adverbalization	副詞化
CAUS	causative	使役
COM	comitative	共同格
COND	conditional	逆接
COP	copula	コピュラ
CVB	converb	副動詞
GEN	genitive	属格
LOC	locative	場所格
NOM	nominative	主語
NPST	non-past	非過去
Q	question	疑問小辞
QUOT	quotative	引用
PL	plural	複数
POL	politeness	丁寧
PROG	progressive	継続相
PST	past	過去
SFP	sentence final particle	終助詞

Leipzig Glossing Rules 参照

参照文献

- Jimenez-Fernandez, Angel L (2015) Towards a typology of focus: Subject position and microvariation at the discourse-syntax interface. In : Christopher Carignan, Elizabeth Peterson, Daniel van Olmen and Fang Xu (eds.) *Ampersand*, 2.49-60.
- Shimoji Michirori (to appear) Information Structure, Focus, and Focus Marking Hierarchies in Ryukyuan Languages. *Gengo Kenkyu* 154.
- Zimmermann, Malte (2008) Contrastive Focus and emphasis. *Acta Linguistica Hungarica* 55. 347-360.
- 此島正年 (1982) 「青森県の方言」 飯豊穀一・日野資純・佐藤亮一 (編) 『講座方言学 4— 北海道・東北地方の方言一』 213-236. 東京：国書刊行会.
- 加藤重広 (1997) 「ゼロ助詞の談話機能と文法機能」『富山大学人文学部紀要』 27 : 19-82.
- 佐藤亮一 (2013) 「方言アクセントの個人差:宮城県気仙沼市のアクセントについて」 『玉藻』 47 : 99-113.
- 鈴木彩香 (2014) 「ガ格の総記/中立叙述用法と裸名詞句の総称/存在解釈の統一的説明」 『言語学論叢』 33 : 35-50.
- 下地理則 (2019) 「現代日本共通語（口語）における主語の格標示と分裂自動詞性」 竹内史郎・下地理則 (編) 『日本語における分裂自動詞性』 東京：くろしお出版.
- 下地理則 (to appear) 「日本語の格」 木部暢子・竹内史郎・下地理則 (編) 『日本語の格表現』 東京：くろしお出版.
- 菅沼貴一 (編) (1935) 『青森縣方言集』 青森：青森縣師範學校.
- 竹田晃子 (2012) 「山形県米沢市方言・山形県方言における条件表現の研究」『大正大學研究紀要』 97 : 119-126.
- 仁田義雄 (編) (2009) 『現代日本語文法 2』 東京：くろしお出版.
- 平山輝男・佐藤和之 (編) (2003) 『青森県のことば』, 日本のことばシリーズ 2. 東京：明治書院
- 益岡隆志・仁田義雄・郡司隆男・金水敏 (2004) 『文法』, 言語の科学 5. 東京：岩波書店.

謝辞

本論文の作成にあたり、指導教官である下地理則先生には大変丁寧なご指導をしていただきました。ご多忙の中、データの整理や結論の方向性、論文の構成など、多岐にわたって、親身に相談に乗ってくださいり、貴重なアドバイスをしてくださいました。この場をお借りして、心より感謝申し上げます。また、貴重な時間を割いてフィールドワークでの調査にご協力してくださった野辺地町の皆様、調査の際にアドバイスをしてくださいました中川奈津子先生、皆様のご協力のおかげで貴重なデータをたくさん集めることができました。この場を借りて改めて感謝申し上げます。そして、九州大学文学部言語学・応用言語学研究室の皆様をはじめ、多くの方に支えられてこの論文を完成させることができました。有難うございました。